

北の鉄道風景

Train number; 1776M

2020.9.19 17:12

1/1600, f/9, ISO 400, f=200mm, Daylight/Sunny

5504×8256 Raw

第115回

秋男くんへの手紙

秋男くん、元気ですか。
君の好きだった汽車は、そこから見えますか。

秋が来るといつも君のことを思い出します。秋に生まれたから秋男っていうんだ、単純なものさ、と言っていたのを、さっき聞いたように思い出します。そして君は続けた。俺は鉄道記念日に生まれたんだ、つてね。君の誕生日は十月十四日でした。私は、いいなあ、と言ったように記憶しています。

一緒にずいぶん歩きましたね。一面の田んぼの中、線路に沿った砂利道は、汽車を見るには絶好でした。線路と道を隔てる柵は背も低く邪魔にはならなかったし、それすらもない場所もたくさんあって汽車は存分なほどの風を巻き上げて眼の前を横切りましたね。雨上がりの水たまりが虹を映したその道も、真つ白いガードレールに仕切られたアスファルトの平面に変わりました。檻に入ったネズミのように



秋の日差しは透明感は、今も昔も変わらない。根室本線 1973



写真と文＝眞船直樹

網に張り付いて眺めなければ、線路も見えなくなりました。

蕎麦屋も、散髪屋も、銭湯も、君と通った鉄道模型の店も、もうありません。いつも見るだけでしたね。お金を払ったのは年に何回あったのかなあ。でも、店の主人は行く度にちゃんと客として話に乗ってくれたし、沢山の夢を売ってくれましたね。ただで。

土曜の放課後、君と連れ立って行った煤^{すす}けたプラットホームや跨線橋は、ずいぶん前になくなりました。ことごとくレールを曲げて造られた構造に、二人で目を輝かせたものでした。そこに轟音を立てて入ってくる機関車の圧倒される存在感に尻込みをしていると、胸を張った機関士から笑顔がこぼれ、白い軍手に招かれるまま、汽車の話聞きましたね。そんなことを一日やつても、十円の赤線入りの入場券で済んだので、得した気分になりました。

今の鉄道を見ないでいつてしまった君は、こんな私の手紙にどんな返事をよこすのだろうかと毎年秋になると思うのです。